

視点を変えると

蒲田女子高等学校三年（東京都）

田口 愛梨

「習うより…」と、先輩が声を掛けて下さる。盆略点前の稽古が終わった私たち後輩は、「慣れる」と肯き応える。「習うより慣れる」が伝統的な茶道部。基本のお稽古の大切さを、この言葉で受け継いで来ています。

ただコロナ禍では、制限があり、やっと限られた時間のなかでのお稽古はいつの間にか、先輩と呼ばれる立場になっていました。

いつも通り後輩の盆略点前を観ていた時に、ふと目に止まったことがあったのです。それは自宅稽古の教本では気が付かなかつた、お道具の置き合わせの位置でした。丁度傍らでは、同級生の部員が先輩の二年生と、炉の薄茶点前を稽古して、お道具の置き合わせについての声が、耳に入ってきました。

「あれ？盆略点前でも、炉のお点前でも、お道具の置き合わせる位置って幾何学的な置き方になるの？」と。瞬間的

でしたが、私の脳裏には？（はてな）マークが飛び交い、目は盆中を真上から覗き込むように見入っていました。

何度もお稽古をして来たはずなのに、まるで何かを発見でもしたような、不思議な感覚で時を止めていた自身に驚きました。それは、盆中の棗と茶筌、さらに茶杓と帛紗も、左右対称に置き合わせるといふ、幾何学的な置き方の美しさにでした。

いつものように当たり前のお稽古なのに、「幾何学的な要素を持った置き合わせの美」を感じている私でした。

もしかして盆中の道具の置き合わせの美こそ、盆略点前の持つ、おもてなしの表現ではないだろうか、思い始めたのです。このお点前こそ小さな盆の中での、基本のお点前が全て凝縮されていることは認識していました。ただお道具を置くという稽古の動作にだけ集中し、お客様側からの視点としての、置き合わせの美を、意識していなかったのです。

「日本の自然観（あるがまま）の美意識」とは異なる「西洋の幾何学的美意識」つまり、伝統的な茶道における点前の近代化なのではと感じたのです。その幾何学的美意識は「最大のおもてなしの心遣い」と、言い換えても過言ではないような気がするのです。

この点前こそ、お客様に心地よく美味しく気軽に、お茶を味わっていただくためのおもてなしの原点である点前な

のだと思いました。

「習うより慣れろ」とはいえ、視点を変えることによって、一段とお点前に対する興味が湧き、その稽古に面白さが増してきました。

限られた時間の中で、全集中して学ぶ稽古から、私に茶道における意識改革、つまり視点を変えてみることで、わかることもあるのだと教えてくれました。